

# 夢遊病者の死

江戸川乱歩

青空文庫



彦太郎ひこたろうが勤め先の木綿問屋もめんどんやをしくじつて、父親てておやの所へ歸つて来てからもう三ヶ月にもなつた。旧藩主M伯爵邸はくしやくの小使こづかいみたいなことを勤めてかつかつ其日そのひを送つてゐる、五十を越した父親の厄介やっかいになつてゐるのは、彼にしても決して快いことではなかつた。どうかして勤め口を見つけ様ようと、人にも頼み自分でも奔ほんそ走うしているのだけれど、折柄の不景気で、学歴もなく、手にこれという職があるでもない彼の様な男を、備やとつて呉くれる店はなかつた。尤も住み込みもつとなればという口が一軒、あるにはあつたのだけれど、それは彼の方から断つた。というのは、彼にはどうしても再び住み込みの勤めが出来ない訳わけがあつたからである。

彦太郎には、幼い時分から寝惚ける癖があつた。ハッキリした声で寝言を云つて、側そばにいるものが寝言と知らずに返事をする、それを受けて又喋るしゃべ。そうしていつまでも問答を繰返すのだが、さて、朝になつて目が覚めて見ると少しもそれを記憶していないのだ。余りいうことがハッキリしているので、気味が悪い様だと、近所の評判になつていた位である。それが、小学校を出て奉公ほうこうをする様になつた当時は、一時止やんでいたのだけれど、どうしたものか二十歳を越してから又再発して、困つたことには、見る見る病勢が募つつて行くのであつた。

夜半にムクムクと起上つて、その辺を歩き廻る。そんなことはまだお手軽な方だつた。ひどい時には、夢中しんまで表の締りを――そ

れが住み込みで勤めていた木綿問屋のである——その締りを開けて、一町内ひとをぐるつと廻つて来て、又戸締りをして寝て了つたことさえあるのだ。

だが、そんな風のこと丈だけなら、気味の悪い奴だ位で済みもしようけれど、最後には、その夢中でさ迷い歩いている間に、他人ひとの品物を持って来る様なことが起つた。つまり知らず知らずの泥坊なのである。しかも、それが二度三度と繰返されたものだから、いくら夢中の仕草しぐさだとはいえ、泥坊を備つて置く訳には行かぬというので、もうあと三年で、年期を勤め上げ、暖簾のれんを分けて貰もらえようという惜しい所で、とうとうその木綿問屋をお払はらい箱ばこになつて了つたのである。

最初、自分が夢遊病者だと分つた時、彼はどれ程驚いたことであらう。乏しい小遣錢こづかいせんをはたいて、医者にもみて貰つた。色々の医学の書物を買込んで、自己療法もやつて見た。あるい或は神仏を念じて、好物の餅もちを断つて病氣平癒へいゆの祈願をさえた。だが、彼のいまわしい悪癖はどうしても治らぬ。いや治らぬどころではない、日にまし重くなつて行くのだ。そして、遂には、あの思出しでもゾツとする夢中の犯罪、あああ、俺おれは何という因果な男だらう。彼はただもう、身の不幸を歎なげく外ほかはないのである。

今までの所では幸さいわいに、法律上の罪人となることだけは免まぬれて来た。だが、この先どんなことで、もつとひどい罪を犯すまいものでもない。いや、ひよつとしたら、夢中で人を殺す様なことさえ、

起らないとは限らぬのだ。

本を見ても、人に聞いても、夢遊病者の殺人というのは間々まある事らしい。まだ木綿問屋にいた頃、飯炊めしたきの爺じいさんが、若い時分ざいしよ在所ざいしよにあつた事実談だといつて、気味の悪い話をしたのを、彼はよく覚えている。それは、村でも評判の貞女ていじよだつたある女が、寝惚けて、野らで使う草刈鎌くさかりがまをふるつてその亭主を殺して了つたというのである。

それを考えると、彼はもう夜というものが怖くて仕様がなないのだ。そして、普通の人には一日の疲れを休める安息とこの床が、彼丈だけには、まるで地獄の様にも思われるのだ。尤も家へ歸つてからは、一寸ちよつと発作がやんでいる様だけれど、そんなことで決して安心は

出来ないのだ。そこで、彼は、住み込みの勤めなど、どうしてもして二度とやる気はしないのである。

ところが、彼の父親にして見ると、折角勤め口が見つかったのを、何の理由もなく断つて了う彼のやり方を、甚だ心得難く思うのである。というのは、父親はまだ、大きくなってから再発した彼の病気について、何も知らないからで、息子がどういう過<sup>あ</sup>失<sup>やまち</sup>で木綿問屋をやめさせられたか、それさえ実はハッキリしない位なのだ。

ある日、一台の車がM伯爵の門長屋へ這入<sup>はい</sup>つて来て、三疊と四疊半二間切りの狭苦しい父親の住居の前に梶<sup>かじ</sup>棒<sup>ぼう</sup>を卸<sup>おろ</sup>した。その車の上から息子の彦太郎が妙にニヤニヤ笑いながら行李<sup>こうり</sup>を下げて



降りて来たのである。父親は驚いて、どうしたのだと聞くと、彼はただフンと鼻の先で笑つて見せて、少し面目めんぼくないことがあつたものだからと答えたばかりだつた。

その其翌日、木綿問屋の主人から一片の書状が届いて、そこには、今度都合により一時御子息を引取つて貰うことにした。が、決して御子息に落度があつた訳ではないからという様な、こうした場合の極きまり切つた文句が記しるされていた。

そこで、父親は、これはてつきり、彼が茶屋酒ちややざけでも飲み覚え、店の金を使い込みでもしたのだろうと早合点はやがってんをして了つたのである。そして、暇さえあれば彼を前に坐らせて、この柔弱にゆうじ者やくものめ奴がという様な、昔気質むかしかたぎな調子で意見を加えるのだつた。

彦太郎が、最初帰つて来た時に、実はこうこうだと云つて了え  
ば訳もなく済んだのであろうが、それを云いそびれて了つた所へ、  
父親に変な誤解をされてお談義まで聞かされては、彼の癖として、  
もうどんなことがあつても眞実を打開うちあける気がしないのであつた。  
彼の母親は三年あとになくなり、他に兄弟とてもない、ほんと  
うに親一人子一人の間あいだから柄であつたが、そういう間柄であれば  
ある程、あの妙な肉親憎悪とでもいう様な感情の為に、お互たがに何  
となく隔意かくいを感じ合つていた。彼が依怙地いこじに病氣のことを隠して  
いたのも、一つはこういう感情に妨さまたげられたからであつた。尤も  
一方では、二十三歳の彼には、それを打開けるのが此このうえ上もなく  
気恥しかつたからでもあるけれど。そこへ持つて来て、彼が折角

の勤め口を断つて了つたものだから、父親の方では益々<sup>ますます</sup>立腹する。それが彦太郎にも反映して、彼の方でも妙にいらいらして来る。という訳で、近頃ではお互に口を利けば、すぐにもう喧嘩<sup>けんかご</sup>腰<sup>し</sup>になり、そうでなければ、何時間でも黙つて睨<sup>にら</sup>み合っているという有様であつた。今日も亦<sup>また</sup>それである。

二三日雨が降り続いたので、彦太郎は、日課の様にしていた散歩にも出られず、近所の貸本屋から借りて来た講談本も読み尽して了い、どうにも身の置き所もない様な気持になつて、ボンヤリと父親の小さな机の前に坐つていた。

四畳半と三畳の狭い家が、畳から壁から天井から、どこからどこまでジメジメと湿つて、すぐに父親を聯<sup>れんそう</sup>想する様な一種の臭

気がむつと鼻を突く。それに、八月のさ中のことで、雨が降ってはいても耐<sup>たま</sup>らなく蒸し暑いのである。

「エツ、死んじまえ、死んじまえ、死んじまえ……」

彼はそこにあつた、鉛の屑<sup>くず</sup>を叩き固めた様な重い不<sup>ぶ</sup>恰<sup>か</sup>好<sup>こう</sup>な文<sup>ぶ</sup>鎮<sup>んちん</sup>で、机の上を滅<sup>めつ</sup>多<sup>た</sup>無<sup>む</sup>性<sup>しょう</sup>に叩きつけながら、やけくその様にそんなことを怒<sup>ど</sup>鳴<sup>な</sup>つたりした。そうかと思うと又、長い間黙りこくつて考え込んでいることもあつた。そんな時、彼はきつと十萬円の夢を見ているのである。

「あああ、十萬円ほしいな。そうすれば働かなくつてもいいのだ。利子で十分生活が出来るのだ、俺の病気だつて、いい医者にかかつて、金をうんとかけたら、治らないものでもないのだ。親<sup>おやじ</sup>父<sup>ちち</sup>に

してもそうだ。あの年になって、みじめな労働をすることはいら  
ないのだ。それもこれも、みんな金だ、金だ。十万円ありさえす  
ればいいのだ。こうつと、十万円だから、銀行の利子が六分とし  
て、年に六千円、月に五百円か、すてきだな……」

すると彼の頭に、いつか木綿問屋の番頭さんに連れられて行つ  
たお茶屋の光景が浮ぶのである。そして、その時彼の側そばに坐つた  
眉の濃い一人の芸妓げいしやの姿や、その声音こわねや、いろいろの艶なまめかしい仕  
草ぐさが、浮ぶのである。

「ところで、何なんだつけ。ああそうそう十万円だな。だが一体全  
体そんな金がどこにあるのだ。エツくそ、死んじまえ、死んじま  
え、死んじまえ……」

そして、又してもゴツンゴツンと、文鎮で机の上を殴るのである。

彼がそんなことを繰返している所へ、いつの間にか電燈がついて、父親が帰って来た。

「今帰ったよ。やれやれよく降ることだ」

近頃では、その声を聞くと彼はゾーツと寒気を感じるのだ。

父親は雨で汚れた靴の始末をしてしようと、やれやれという恰好で四畳半の貧弱な長火鉢ながひばちの前に坐つて、濡れた紺の詰襟つめえりの上う衣わぎを脱いで、クレツプシャツ一枚になり、ズボンのポケットから取出した、真鍮しんちゆうのなたぎせるまめ煙管で、まず一服するのであった。

「彦太郎、何か煮て置いたかい」

彼は父親から炊事係を命ぜられていたのだけれど、殆どそれを  
実行しないのだった。朝などでも、父親がブツブツ云いながら、  
自分で釜の下を焚きつける日が多かった。今日とても、無論何の  
用意もしてないのである。

「オイ、なぜ黙つとるんだ。オヤオヤ湯も沸いていないじゃない  
か。身体を拭くことも出来やしない」

何といつて見ても、彦太郎が黙つていて答えないので、父親は  
仕方なく、よつこらしよと立上つて、勝手許へ下りて、ゴソゴソ  
と夕餉の支度にとりかかるのであった。

その気配を感じながら、じつと机の前の壁を見つめている彦太  
郎の胸の中は、憎しみとも悲しみとも、何とも形容の出来ない感

情の為に、煮え返るのである。天氣のよい日なれば、こういう時には、何も云わずにプイと外へ出て、その辺を足にまかせて歩き廻るのだけれど、今日はそれも出来ないの、いつまでもいつまでも、雨もりで汚れた壁と睨めつくらをしている外ほかはない。

やがて、鮭さけの焼いたので貧しい膳ぜんだ立てをした父親が、それ丈だけが楽しみの晩ばん酌しやくにと取りかかるのである。そして、一本の徳とく利くりを半分もあげた頃になると、ボツボツと元気が出て、さて、お極きまりのお談義が始まるのだ。

「彦太郎、一寸ここへお出いで、……どういふ訳で、お前は俺のいうことに返事が出来ないのだ。ここへ来いといったら来るがいいじゃないか」



そこで、彼は仕方なく机の前に坐つたまま、向き丈けを換えて、始めて父親の方を見るのだが、そこには、頭の禿はげと、顔の皺しわとを除くと、彼自身とそっくりの顔が、酒の為に赤くなつて、ドロんとした目を見はつているのである。

「お前は毎日そうしてゴロゴロしていて、一体恥しくないのか……」と、それから長々とよその息子の例話などがあつて、さて

「俺はな、お前に養つて呉れとは云わない。ただ、この老おいぼれの脛すねかじ噛やりをして、ゴロゴロしていることだけは、頼むから止めてくれ、どうだ分つたか。分つたのか分らないのか」

「分つてますよ」すると彦太郎がひどい剣幕で答えるのだ。「だから、一生懸命就職口を探しているのです。探してもなければ仕

方がないじゃありませんか」

「ないことはあるまい。此このあいだ間 ××さんが話して下すつた口を、

お前はなぜ断つて了つたのだい。俺にはどうもお前のやることはさっぱり分らない」

「あれは住み込みだから、厭いやだと云つたじゃありませんか」

「住み込みが何故なぜいけないのだ。通勤だつて住み込みだつて、別に変りはない筈はずだ」

「……………」

「そんな贅ぜいたく沢たくがいえた義理だと思ふか。先せんのお店たなをしくじつたのは何が為だ。みんなその我わがまま儘ままからだぞ。お前は自分ではなかなか一人前の積つもりかも知れないが、どうして、まだまだ何も分り

やしないのだ。人様が勧めて下さる所へハイハイと云つて行けばいいのだ」

「そんなことを云つたつて、もう断つて了つたものを、今更ら仕様がないじゃありませんか」

「だから、だからお前は生意気だと云うのだ、一体あれを、俺に  
一 いちごん 言の相談もしないで、断つたのは誰だ。自分で断つて置いて、今更ら仕様がないとは、何ということだ」

「じゃあ、どうすればいいのです。……そんなに僕がお邪魔になるのだつたら、出て行けばいいのでしよう。エエ、明日あすからでも出て行きますよ」

「バ、馬鹿ツ。それが親に対する言草いいぐさか」

やにわに父親の手が前の徳利にかかると、彦太郎の眉間みけんめがけて飛んで来る。

「何をするのです」

そう叫ぶが早いか、今度は彼の方から父親に武者むしやぶりついて行く。狂気の沙汰さたである。そこで世にもあさましい親と子のとつ組合が始まるのだ。だが、これは何も今夜に限ったことではない。もう此頃このころでは毎晩の様に繰返される日課の一つなのである。

そうして、とつ組合っている内に、いつも彦太郎の方が耐たりかねた様に、ワツとばかりに泣き出す。……何が悲しいのだ。何とすることもなく凡すべてが悲しいのだ。詰襟詰襟の洋服を着て働いている五十歳の父親も、その父親の家うちでゴロゴロしている自分自身も、

三畳と四畳半の乞食小屋の様な家も、何もかも悲しいのだ。……

……………

そして、それからどんなことがあつたか。

父親が火鉢の抽斗ひきだしから湯札を出して、銭湯へ出掛けた様子だった。暫くたつて帰つて来ると、彼の御機嫌をとる様に、

「すっかり晴れたよ。オイ、もう寝たのか、いい月だ、庭へ出て見ないか」

などといつていた。そして自分は縁側えんがわから庭へ下りて行つた。その間中、彦太郎は四畳半の壁の側へ俯伏うつぶして、泣き出した時のままの姿勢で、身動きもしないでいた。蚊帳かやもつらないで全身を蚊の食うに任せ、ふてくされた女房の様に、棄鉢すてばちに、口癖の

「死んじまえ。死んじまえ」を念仏みたいに頭の中で繰返していた。そして、何時の間にか寝入って了つたのである。

それからどんなことがあつたか。

その翌朝、開けはなした縁側からさし込む、まばゆい日光の為に、早くから目を覚めた彦太郎は、部屋の中がいやにガラんとして、昨夜のまま蚊帳も吊つてなければ床も敷いてないのを発見した。

さてはもう父親は出勤したのかと、柱時計を見ると、まだやつと六時を廻つたばかりだ。何となく変な感じである。そこで、睡い目をこすりながら、ふと庭の方を見ると、これはどうしたというのであろう。父親がその籐椅子とういすに凭れ込んで、ぐったりとし

ているではないか。

まさか睡っているのではあるまい。彦太郎は妙に胸騒ぎを覚えながら、縁側にあつた下駄をつっかけると、急いで籐椅子の側へ行つて見た。——読者諸君、人間の不幸なんてどんな所にあるかわからないものだ。その時縁側には、二足の下駄があつて、彼の穿いたのはその内の朴齒ほおばの日和下駄ひよりげたであつたが、若しそうでなく、もう一つの桐きりの地下穿じかばきの方を穿いていたなら、或はあんなことにならなくて済んだのかも知れないのだ。——

近づいて見ると、彦太郎の仰ぎょうてん天てんしたことは、父親はそこで死んでいたのである。両手を籐椅子の肘かけからダラリと垂らし、腰の所で二つに折れでもした様に身体を曲げて、頭と膝とが

殆どくっ着かんばかりである。それ故、ゆえ見まいとしても見えるのだが、その後頭部がひどい傷になっている、出血こそしていないけれど、いうまでもなくそれが致命傷に相違ない。

まるで作りつけの人形でもある様に、じつとしてゐる父親の奇妙な姿を、夏の朝の輝かしい日光が、はれがましく照していた。一匹の虻あぶが鈍い羽音を立てて、死人の頭の上を飛び廻っていた。

彦太郎は、余り突然のことなので、悪夢でも見ているのではないかと、暫くはぼんやりそこにたたずゐていたが、でも、夢であろう筈もないので、そこで、彼は庭つづきの伯爵邸の玄関へ駈けつけて、折から居合せた一人の書生に事の次第を告げたのである。

伯爵家からの電話によって間もなく警察官の一行がやって来た



が、中に警察医も混っていて、先<sup>ま</sup>ず取あえず死体の検診が行われた。その結果、彦太郎の父親は「鈍器による打撃の為に脳震盪<sup>のうしんとう</sup>」を起したもので、絶命したのは昨夜十時前後らしいということが分つた。一方彦太郎は警察署長の前に呼び出されて、色々と取調べを受けた。伯爵家の執事も同様に訊<sup>じんもん</sup>問された。併<sup>しか</sup>し兩人とも何等警察の参考になる様な事柄は知つていなかったのである。

それから現場の取調べが開始された。署長の外に背広姿の二人の刑事が、色々と議論を戦わせながら、併し如何にも専門家らしくテキパキと調査を進めて行つた。彦太郎は伯爵家の召<sup>めしつかい</sup>使達と一緒にぼんやりとその有様を眺めていた。彼は余りのことに思考力を失つて了つて、その時まで、まだ何事も氣附かないでいた

のだ。一種の名状しがたい不安に襲われてはいたけれど、併しそれが何故の不安であるか、彼は少しも知らなかつたのである。

そこは庭とは云つても、彦太郎の家の裏木戸の外にある方四五間の殺風景な空地なので、彦太郎の家と向い合つて伯爵家の三階建ての西洋館があり、右手の方は高いコンクリート塀を隔てて往來に面し、左手は伯爵家の玄関に通ずる広い道になっている。その殆ど中央に主家の使いふるしの毀れかかつた籐椅子が置いてあるのだ。

無論他殺の見込みで取調べが進められた。併し、死体の周囲からは加害者の遺留品らしいものは何も発見されなかつた。空地が隅から隅まで搜索せられたけれど、西洋館に沿つて植えられた五

六本の杉の木を除いては、植木一本、植木鉢一つないガラシとした砂地で、石ころ、棒切れ、其他そのた兇器に使われ得るう様な品物は勿も論ちろん、疑うべき何物をも見出すことは出来なかつた。

たつた一つ、籐椅子から一間ばかりの所にある杉の木の根許ねもとの草の間に、一束のダリヤの花が落ちていた外ほかには、だが、誰もそんな草花などには気がつかなかつた。或は、仮令たと気がついていても特別の注意を払わなかつた。彼等はずもつと外のもの、例えば一筋の手拭てぬぐいとか、一個の財布とか、所謂いわゆる遺留品らしいものを探していたのである。

結局唯一の手掛りは足跡だつた。幸なことには降りつづいた雨の為に、地面が滑かになつていて、前夜雨が上つてからの足跡だ

けがハッキリと残っているのだ。とは云え今朝からもう沢山たくさんの人が歩いてるので、それを一々しら検べ上げるのは随分ずいぶん骨の折れる仕事ではあったが、これは誰の足跡、あれは誰の足跡と丹念にあてはめて行くと、案あんの定じょう、あとに一つ丈け主のない足跡が残ったのである。

それは幅の広い地下穿きらしいもので、その辺をやたらに歩き廻つたと見えて、縦横じゅうおうむじん無尽の跡がついている。そこで、刑事の一人がそれを追つて行つて見ると、不思議なことには、足跡は彦太郎の家の縁側から発して、又そこへ帰つてゐることが分つた。そして、縁側の型ばかりの沓脱石くつぬぎいしの上に、その足跡にピッタリ一致する古い桐の地下穿きがチャンと脱いであつたのである。

最初刑事が足跡を検べ始めた頃に、彦太郎はもうその桐の古下駄に気がついていた。彼は父親の死体を発見してから一度も家中へ這入ったことはないのだから、その足跡は昨夜ついたものに相違ないが、とすると、一体何なんびと人がその下駄を穿いたのであるうか。……

そこで、彼はやっとある事を思当つたのである。彼はハッと昏こ倒し相そうになるのをやっと耐こらえることが出来た。頭の中でドロドロした液体が渦巻の様に回転し始めた。レンズの焦点が狂った様に、周囲の景色がスーツと目の前からぼやけて行つた。そして、そのあとへ、あの机の上の重い文鎮をふり上げて、父親の脳天を叩きつけようとしている、自分自身の恐ろしい姿が幻の様に浮ん

で来た。

「逃げろ、逃げろ、さあ早く逃げるんだ」

何者とも知れず、彼の耳の側で慌あわただしく叫び続けた。

彼は一生懸命で何気ない風を装いながら、伯爵家の召使達の群から少しずつ少しずつ離れて行った。それが彼にとってどれ程の努力であつたか。今にも「待てッ」と呼び止められ相な気がして、もう生きた心地もないのである。

だが、仕合せなことには、誰もこの彼の不思議な挙動に気付くものもなく、無事に家の蔭まで辿たどりつくことが出来た。そこから彼は一息に門の所へ駆けつけた。見ると門前に一台の警察用の自転車転車が立てかけてある。彼はいきなりそれに飛び乗って、行手も

定めず、無我夢中でペタルを踏んだ。

両側の家並やなみがスーツスーツと背後へ飛んで行った。幾度いくたびとな  
く往来の人に突きあたつて顛覆てんぷくし相になつた。それを危あやうく避け  
ては走つた。今何という町を走っているのか無論そんなことは知  
らなかつた。賑かな電車道などへ出そうになると、それをよけて  
淋しい方へ淋しい方へとハンドルを向けた。

それからどれ程炎天の下を走り続けたことか、彦太郎の気持で  
は十分十里以上も逃げのびたつもりだけれど、東京の町はなかな  
か尽きなかつた。ひよつとすると、彼は同じ所をグルグル廻つて  
いたのかも知れないのだ。そうしている内に、突然パンというひ  
どい音がしたかと思うと、彼の自転車は役に立たなくなつて了つ

た。

彼は自転車を捨てて走り出した。白<sup>しろがすり</sup>紺<sup>こ</sup>の着物が、汗の為に、

水にでも漬けた様にビツシヨリ濡れていた。足は棒の様に無感覺になつて、一寸した障<sup>しょうがいぶつ</sup>礙物<sup>がいぶつ</sup>にでも、つまずいては倒れた。

心臓が胸の中で狂氣の様に躍<sup>おど</sup>り廻つていた。咽喉<sup>のど</sup>はカラカラに

渴いて、ヒューヒューと喘<sup>ぜんそく</sup>息病<sup>や</sup>みみたいな音を立てた。彼はも

う、何の為に走らねばならぬのか、最初の目的を忘れて了つていた。ただ目の前に浮んで来る世にも恐しい親殺しの幻影が彼を走らせた。

そして、一町、二町、三町、彼は酔っぱらいの様な恰好で、倒れては起き上り、倒れては又起き上つて走つた。が、その痛まし



い努力も長くは続かなかつた。やがて彼は倒れたまま動かなくなつた。汗と埃ほこりにまみれた彼の身体を、真夏の日光がジリジリと照りつけていた。

暫くして、通行人の知らせで駈けつけた警官が、彼の肩を掴つかんで引起そうとした時に、彼は一寸ふり離して逃げ出す恰好をしたが、それが最後だった。彼はそうして警官の腕に抱かれたまま息を引きとつたのである。

その間に、伯爵邸の父親の死骸の側では何事が起つていたか。

警官達が彦太郎の逃亡に気付いたのは、彼が半里はんみちも逃げ延びている時分であつた。署長は、もう追っかけても駄目だと悟ると、

猶予なく伯爵家の電話を借りて、その旨を本署に伝え、彦太郎逮捕の手配てくぱりを命じた。そうして置いて、彼等は猶もなお現場げんじょうの調査を続け、かたがた旁々検事の来着を待つことにしたのである。

無論彼等は彦太郎が下手人げしゆにんだと信じた。現場に残された唯一の手掛りである桐の下駄が、彦太郎の家の縁側から発見されたこと、その下駄の主と見做みなすべき彦太郎が逃亡したこと、この二つの動かし難い事実が彼の有罪を証拠立てていた。

ただ、彦太郎が何故に真実の父親を殺害したか、そして又、下手人である彼が、なぜ警官が出張するまで逃亡を躊躇ちゆうちよ躊躇ちよしていたかという二点が、疑問として残されていたけれど、それもいざれ彼を逮捕して見れば分ることなのである。ところが、そうして

事件が一段落をつげたかと思えた時に、実に意外なことが起つた。「その人を殺したのは、私です。私です」

伯爵邸の方から一人の真蒼まっさおな顔をした男が、署長の所へ走つて来て、いきなりこんなことを云い出したのである。その男はまるで熱病患者の様に、「私です私です」とそればかりを繰返すのだ。

署長を始め刑事達は、あつけにとられて、不思議なちんにゆうしや闖入者ちんの姿を眺めた。そんなことがあり得るだろうか。まさか、この男が彦太郎の家にあつた桐の下駄を穿いたとも思われぬ。そうだとすると、少しも足跡を残さないで、どうして殺人罪を犯すことが出来たのであろうか。そこで、彼等は兎も角とかく、男の陳述を聞いて

見ることにした。

それは実に意外な事実であつた。警察始まつて以来の記録といつても差支ない程、不思議千萬な事実であつた。さて、その男（それは伯爵家の書生の一人であつた）の告白した所はこうなのである。

昨日、伯爵邸に数人の来客があつて、西洋館三階の大広間で晩餐が供せられた。それが終つて客の帰つたのが丁度九時頃であつた。彼はそのあと片付けを命ぜられて、部屋の中をあちこちしながら働いていたが、ふと絨氈の端につまずいて倒れた。そのはずみに部屋の隅に置いてあつた花瓶を置く為の高い台を倒し、台の上の品物が、開けはなしてあつた窓から飛び出したのである。

その品物が若し花瓶であつたら、こんな間違いは起らなかつたのであろうが、それは、花瓶の台にはのつていたけれど、花瓶ではなくて、五六時間もたてば跡あと方かたもなく融とけてなくなつて了う氷かたまりの塊かたまりだつたのである。裝飾用の花はな氷こおりだつたのである。水を受ける為の装置は台に取りつけてあつたので、上の氷丈こけが落ちたのだ。無論それは昼間からその部屋に飾つてあつたのだから、大部分解けて了つて、殆ど心丈しんけが残つていたのだけれど、でも老人に脳震盪のうしんどうを起させるには十分だつたと見える。

彼は驚いて窓から下を覗いて見た。そして、月あかりでそこに小使の老人が死んでいるのを知つた時、どんなに仰天したか。仮令あやま過あやまちからとはいえ俺は人殺しをやつて了つたのだ。そう思うと

もうじつとしていられない。みんな皆に知らせようか、どうしようか、とつおいつ思案をしている中うちに時間が経たつ、若しこのまま明日の朝まで知れずにいたら、どうなるだろう。ふと彼はそんなことを考えて見た。

いうまでもなく、氷は解けて了うのだ。中のダリヤの花丈は残っているだろうけれど、ひよつとしたら、気付かれずに済むかも知れない。それとも今から氷のかけらを拾いに行こうか。いやいや、そんなことをして若し見つかったら、それこそ罪人にされて了う。彼は床へ這入っても一晩中まんじりともしなかつた。

ほうばいところが朝になつて見ると、事件は意外な方向に進んで行つた。朋輩ほうばいから詳しい様子を聞いて、一時はこいつはうまく行つたと

喜んだものの、流石に善人の彼はそうしてじつとしていることは出来なかつた、自分の代りに一人の男が恐しい罪名を着せられてるかと思うと、余りに空恐しかつた。それに又、そうして一時は免れることが出来てもいずれ眞実が暴露する時が来るに相違なかつた。そこで彼は今は意を決して署長の所へやって来た。という訳であつた。

これを聞いた人々は、余りに意外な、そして又余りにあつけない事實に、暫くはただ顔を見合せているばかりであつた。

それにしても彦太郎は早まつたことをしたものである。その時は彼が逃亡してからまだ三十分も経っていないのだつた。それとも又、彼が、いや彼でなくとも、刑事なり伯爵家の人達なりが、

あの杉の根許に落ちていた一束のダリヤの花にもつとよく注意したならば、そしてその意味を悟ることが出来たならば、彦太郎は決して死ななくとも済んだのである。

「併しおかしいねえ」暫くしてから警察署長が妙な顔をして云った。「この足跡はどうしたというのだろう。それから、死人の息子はなぜ逃亡したのだろうか」

「分りましたよ、分りました」丁度この時問題の桐の下駄を穿き試みていた一人の刑事がそれに答えて叫んだ。「足跡はなんでもないので。この下駄を穿いて見ると分りますがね。割れているのですよ。見た所別状ない様ですけど、穿いて見ると真中からひび割れていることが分るのです。もう一寸で離れて了い相です。



誰だつてこんな下駄を穿いているのは氣持がよくありませんからな。きつと被害者が庭を歩いている内にそれに氣づいて穿き換えたのですよ」

若しこの刑事の想像が當つてしているとすると、彼等は今まで被害者自身の足跡を見て騒いでいた訳である。何という皮肉な間違いであろう。多分それは、殺人が行われたからには犯人の足跡がなければならぬという尤もな理窟が彼等を迷わしたのではあろうけれど。

その翌々日、M伯爵家の門を二つの棺かんが出た。いうまでもなく、不幸なる夢遊病者彦太郎とその父親を納めたものである。噂うわさを聞いた世間の人達は、だれもかれも、彼等親子の変死を氣の毒から

ぬものはなかった。だが、あの時彦太郎がなぜ逃亡を試みたかと言う点だけは、永久に解くことの出来ない謎として残されていた。

## 青空文庫情報

底本：「江戸川乱歩全集 第一巻 屋根裏の散歩者」光文社文庫、  
光文社

2004（平成16）年7月20日初版1刷発行

2012（平成24）年8月15日7刷発行

底本の親本：「江戸川乱歩全集 第一巻」平凡社

1931（昭和6）年6月

初出：「苦楽」プラトン社

1925（大正14）年7月

※初出時の表題は「夢遊病者彦太郎の死」です。

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

※底本巻末の平山雄一氏による註釈は省略しました。

入力：門田裕志

校正：江村秀之

2017年9月24日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 夢遊病者の死

江戸川乱歩

2020年 7月13日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>